

社説

<2020.4.28>

「地域との連携」さらに

文化芸術大20年

静岡文化芸術大(浜松市中区)が今春、開学20年を迎えた。文化政策、デザイン学部と大学院を擁し、卒業生は5千人余り。多くが静岡県内外の企業、行政、設計・造形分野などで活躍している。大学としてこの節目を機に、10年先を展望する改革構想に着手する考えだ。浜松産業界など地元の強い要請を受けて開学した経緯を踏まえれば、基本理念「地域・世代・世界に開かれた大学」の一層の深化を求めたい。

改革構想の総称は、「遠州学林」。学林は老若を問わず、盛んに学ぶ人たちが集う場を指す。国内外の研究者や学生、留学生、教職員らが専門分野を超えて対話をする滞在型の教育研究交流施設を学内に整備する。持続可能な社会につながる政策、多文化共生、デザイン、三遠南信の地域課題などの共同研究に取り組む。大学院博士課程の新設も目指す。

地域との連携こそが20年の歩みそのものと言える。改革構想は壮大で期待感を抱かせるものの、地元をどう巻き込み、成長に結び付けていくかはまだ見えていない。

文化芸術大は2000年、県立短期大学部を改組し、県と浜松市、産業界が協力して運営する公設民営の私立大として開学した。静岡大工学部と浜松医科大が立地する市にとって文系の四年制大は悲願だった。ものづくり地域として工業デザインの担い手を育てる学部も待望されていた。10年に県設立の公立大学法人へ移行した。

地域との密接な距離感は授業にも色濃く表れる。独自の講義「静岡学」は県内企業、市民団体、行政関係者ら

講師に本県の文化や経済、社会の現状を学ぶ。昨年度は「お茶の歴史と飲み方」「プラモデル聖地」など全15回を開講した。棚田再生とビジネス化に挑戦した「引佐耕作隊」など、教員が用意したプログラムを学生が選択して実践する地域連携演習も特徴の一つだ。

開学当初は2割だった県外出身学生が6割を占める近年、地域を知ってもらう授業は意義深い。学生が商店街行事に参加する姿が見られるようになり、就活で県内に目を向ける機会も広がった。18年には開発途上国生産品を適正価格で取引する運動を推進する「フェアトレード大学」にアジアで初めて認定され、多文化共生を進める浜松市の取り組みを後押ししている。

教員による行政の審議会や調査への協力、産学官連携事業参画など地域のシンクタンクの役割も担い始めている。地域との共同歩調をさらに強めながら、「なくてはならない」大学の在り方を探り続けてほしい。